

編集長対談

読売新聞東京本社・社長
老川祥一さん

ジャーナリズムを考える

人の心を育てる

それが新聞の役割

船乗りになりたかった少年は、社会に関心を抱き、
真実が知りたいと、新聞記者になった。
物事には前後左右裏表があることを知り、
客観的に伝えることの難しさを知った。
子育てをする母親の悩みや苦しみを知ったとき、
じっとしてはいられず、
少しでも母親の支えになりたいと思ったという。
世界一大きな新聞社の社長と日本一小さな新聞社の社長が
これからの新聞の役割について、本気で語った。



OIKAWA SHOICHI

Profile

おいかわしょういち ● 読売新聞東京本社代表取締役社長・編集主幹。1941年東京都出身。1964年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。64年読売新聞社(東京本社)入社。盛岡支局。70年政治部、76年ワシントン支局。論説委員、政治部長などを経て、98年取締役編集局長。2001年読売新聞大阪本社専務取締役編集担当。05年読売新聞大阪本社代表取締役社長。07年以降、現在に至る。プライベートでは子ども1人、孫2人。

新聞記者とは、人間の悲喜こもごもを自身の心で感じ、客観的に伝える仕事。一面的な印象頼みではないのです。

藤本 長年この世界で活躍されてきた老川さんに、今日はジャーナリストの原点を学ばせていただければと思つてい

ます。それにしても、日本一大きな新聞社の社長に、日本一小さな新聞社の私がそんな質問をするなんてあつかましいですね(笑)。

老川 いいえ、とんでもない。でもすみません、日本一だけ

ではなく一応、世界一です。藤本 えっ！それは失礼しました。勉強不足でした。今、読売新聞の発行部数はどのくらいなのですか。

老川 1000万部超、おかげさまで世界第一位です。

藤本 想像もつかない数字ですが、私たちの新聞は10万部「マザージャーナリズム」とい

って、「お母さんの視点」を大事にしているんです。

老川 いやあ、面白い。すべてにおいて、お母さんの視点は大切

です。藤本 お母さんの現場は家庭や地域です。お母さんが子どもとの関わりの中で感じたこと、体験したことを綴ったり、

地域の人々や出来事を記事にしたり。子育てや教育はもちろ

ろん、環境、経済、子どもたちにとつて本当にいい未来をつ

つくりたいという視点で発信しています。

老川 ぼくら新聞記者の現場は、国会や事件・事故。若い頃

はみな地方回りで、最初は警察を担当。殺人事件や交通事故

に当たると、生々しい取材を経験

します。ある意味、人間生活の悲喜こもごもを自身の心で感じ、客観的に伝える仕事といえるでしょう。

藤本 新聞には影響力があります。世の中の人々を啓蒙し

リードしていくという意味ではやりがいもあると思います

が、責任も重大ですね。老川 自分の目で確かめて、本

当のことを伝えるというところ。一方からではなく、前後左右裏表、いろいろな角度から物事を見る必要があります。

テレビは情報の一部を放映し、またコメンテーターの一言が

さまざまな誤解を生む。新聞は、そうはいきません。新聞記者が小説家や学者と違うのは、

事実の背景にある社会的な問題を正確に理解した上で書

くということです。藤本 物事には事実と真実がある。まさに、ジャーナ

リズムの原点ですね。最近を書く側の意識、社会への興味や関

心は薄れているのでしょうか。老川 確かにペンを持つ人間の

意識は重要です。書くことが嫌いで

はできない仕事ですが、ぼくの場合は好奇心がま

老川 子どもの頃は船乗りになりたかったんです。でも「地学」で0点を取ってしまった、これじゃダメだとあきらめま

した。高校と大学と安保闘争の時代。政治に興味を持ち始め、「正しい情報を伝えなければ、国民が惑わされる!」と、新聞記者を志望したので

す。藤本 小さい頃はどんなお子さんでしたか。

老川 どちらかといえば、おとなしいほうだったかな。

藤本 ご両親は、どんな方ですか。

老川 父方は浅草の魚問屋。母方は長野の小領主で、商人と武家の血を引いています。母は没落武士の家に育ち、物

事のけじめやしつけにうるさい人。「書く」ことは母になら

ったのかな。さらさらと文章を書く人でした。残念ながら、父にはそろばんのはじき方は

ならいませんでした(笑)。藤本 これまでたくさん現場を歩かれたと思いますが、記憶に残っている取材があれば教えてください。

老川 1968年に起きたマグニチュード7.9の十勝沖地震。青森や八戸も震度5を記録し、八戸の街は丸焼け状態

でした。私は盛岡支局員でまだかけだしでしたが、ちょうど娘が生まれたばかり。余震が続く中、家族には心細い

思いをさせました。我々には、命が大変なときこそ伝える使命があり、家族は大変です。

藤本 それではお子さんが小さい頃は忙しくて、子育てどころではなかったでしょうね。

老川 今は家族を大事にしていますが、当時は家庭をないがしろにしましたから、

とても人様にお話できたものではありませぬ。昔は、新聞は男の世界などといわれ、家

に父親は不在。妻にもずいぶん迷惑をかけました。

子育て応援団 企業・団体 募集!

『月刊お母さん業界新聞』は、一般のフリーペーパー(広告紙)ではなく、子育てをしているお母さんたちが、心から笑顔になるための媒体です。この新聞をひとりでも多くの母親たちに読んでいただけるように、子育て応援団(企業・行政・団体)を募集しています。企業のCSR、地域の活性化、子育て支援、社員教育、販売促進、企業のノベルティ、プロモーション版など、『月刊お母さん業界新聞』のコンテンツを活用したプロモーションをご提案します。



株式会社トランタンネットワーク新聞社 [お母さん大学] <http://www.okaasan.net/> [トランタン新聞社] <http://www.30ans.com/>

藤本 日本の高度経済成長の時代ですね。最近の新入社員の方はいかがですか。

老川 「新聞記者志望」といえば昔は、ひとクセもふたクセもあるが、骨のある奴が多かった。しかし今は、給料や安定第一。「証券会社に商社、放送局に国家公務員にも受かった。でも新聞社が一番の志望です」なんて平気で言いますからね。そういう人に限って、現場ですぐに音を上げる。不況の就職難で、最近はいい人材も増えてはきましたが…。

藤本 「やりたいことが何もない。わからない」という若者も多く、ブランドで職業を決める時代なんですね。

老川 初心がはつきりしないから困難に立ち向かう力が弱く、嫌なら辞めるし、仕事にストレスになってしまつた。